術」とおとしめた。一方、鶴見さんには、芸術とは「たのしい記号」だという定義があって、そのやりとりの場としてmarginal artもとらえる。

竹内好は、死の直前、「自分はマンガがよくわからないんだが、マンガ世代がどう魯迅を読むかに期待をもってるんだ」と鶴見さんに話したそうです。あまりに楽しそうに鶴見さんがマンガを読むのを見ていて、きっと竹内さんはうらやましく感じていたんでしょうね。

ベ平連——町にふきこぼれる共同体

米軍によるベトナム北爆が一九六五年に始まります。この時に呼びかけられた「ベ平連」（ベトナムに平和を！市民連合）にはたくさんの市民、学生が参加しました。六〇年安保以降の五年間は、市民運動が急速に衰えていて、「声なき声の会」の例会などでも参加者が数名といったことが続いたようです。それでも、鶴見さんらはずっとやり続けていた。しかし「ベ平連」では、また、どっと、大勢の人たちが街に出てきた。〝町にふきこぼれる共同体〟、これは寺山修司（詩人、劇作家）の「書を捨てよ、町へでよう」といった言葉に響きあうところがありますね。寺山自身もこの頃、思想の科学研究会に加わっています。かなりいかがわしげな会になっていたことも、寺山の関心を誘ったんでしょう。

非暴力直接行動といった反戦運動の動き方自体、鶴見さんのプラグマティズムから導き出される行動計画にかない、また、この人自身のアナキズムにもかなっていたでしょう。状況を見極め、自分のなし得る行動計画を立てて、それに即して動いていく。以前、「もしベトナム戦争がずっと終わらなかったら、鶴見さん自身はどうしたと思いますか？」って尋ねたことがあるんですが、「私はずっとベ平連をやっていたでしょう」という答えでした。実行できると考えて、この計画を立てたんだから、やり通せるはずだと。その持久力は、すさまじい。

マルクス主義の左翼でもなく、ナショナリズムの右翼でもなく、ほどほどのリベラルがいいんだとか、そういう考え方ではない。石橋湛山（評論家、政治家）や長谷川如是閑（評論家）が偉かったのは、彼らの主張がリベラルだったからではなくて、石橋には石橋の、自身の思想を貫くことへの命がけの態度があって、如是閑のえらさもそこにあった。そういう見方です。左右を足して二で割ったような思潮が、市民生活も邪魔だてしないからちょうどいいんだ、というのとは全然違う。

鶴見さんの言う「非暴力直接行動」は、暴力との関係においても、もっとぎりぎりのものなんです。ベ平連の若者たちの間で、たとえばデモのもみ合いの中で、警官を殴ってしまったり、喧嘩があったり、その程度のことはしょっちゅうあったでしょう。普通の知識人だったら、けっこう、そういうことにうんざりしたと思います。けれど、鶴見さんは「それじゃあ、だめじゃないか」と叱るくらいのことはしたでしょうが、あきらめない。なぜあれだけ寛容な態度を保ったままで運動を持続できたか、不思議なくらいなのですが。

ただ、そういう場面では、ガンジー

（インドの独立運動家）という参照例があったのは確かでしょう。ガンジーの非暴力っていうのは、要するに、敵を殺すことを政治の手段としないという考えですね。殺すのは絶対反対。でも、それ以外はあらゆる手立てを尽くして抵抗する、という態度が、その「非暴力」には含まれている。

鶴見さんがこの時期に書いているものの中に、ガンジーが暴漢に遭った時、護衛役の息子が、暴漢を殴り返して大けがを負わせてしまう話が出てきます。とんでもないことをしてしまったと思って、息子が父親であるガンジーに「すみません」と謝ったら、ガンジーは、「あそこでお前が何もやらなかったら、お前はただの臆病者だ」と答えたという。

殺すのは絶対嫌だし、内ゲバも絶対嫌。だけれども、国家権力が強制力によって若者を戦場に送って殺し合いをさせることと、若者同士が喧嘩して相手をポカッと殴っちゃうことの間には、絶対的な開きがある。この違いを学校教育やマスメディアの報道は塗り潰しちゃうようなところがあるけれども、鶴見さんは、そこにあるゴマカシについても、ちゃんと考え抜いてきたんだと思いますね。

退行計画の実践

だんだん「退行計画」のようなものを実地にうごかしたいという欲望が鶴見さんに出てきたのは、八九年に「世界」誌上で、ダグラス・ラミス（政治思想）の司会によって、シェルドン・ウォリン（多元主義をとる政治学者）と〈ラディカル・デモクラシーの可能性〉というテーマで対談した時あたりからではないかと思います（『思想とは何だろうか』に収録）。

鶴見さんは、もともとは記憶力が非常に良い人です。人との会話でも、同じことを繰り返すということがなかった。

それなのに、この対談の時は、なぜだか何度も「わたしは不良少年です」と言い続けた。〈ラディカル・デモクラシー〉というものを術語や教養を積み上げて定義するより、「自分は不良少年だった」し、今でもそうであると、その単純な原則に繰り返し立ち返ることで世界と向き合う。それが、もうろくを迎えた老人の中に持続されうる〈ラディカル・デモクラシー〉の在り方だということでしょうね。そうした態度が、ハーヴァード出身の米国知識人との英語による対談で出てくるのが、かなり意識的な一つの画期だったと思います。

幼年時代と老年とを貫く「親問題」へと立ち返っているわけです。七〇代、八〇代は、新しい術語を積み上げることで思想を語ることには、おそらく向いていないでしょう。けれど、こういうふうに、自分の内なる民話に繰り返し戻っていくことを通して、さらに新しい世界を探求できる。もうろくまで含めて、自分の人生をくまなく使いたいという、思想家としての欲の深さですね。

このウォリンとの対談で、鶴見さんは、世界中に現実の問題として核兵器がたくさんあることを考えると、個々の国家というものをまたいだ形で核を統制していく、世界政府的なものは必要だろうとも言っています。すると、